

暮らしを恵む庭についてのご紹介



花の拠点「はなふる」には道内の一流ガーデナーによるテーマガーデンが数多く設けられますが、この「暮らしを恵む庭」は一般住宅における住まいと暮らしに密着した楽しみ方を提供する「暮らしのモデルガーデン」をコンセプトとしています。この庭の造成には恵庭市フラワーマスター協議会が主体として参加しています。植物の植え込みは2021年5月11日に行われ、「はなふる」ができる前に市民有志が世話をしていた「いこいの花畑」の花達の一部が移植されています。

暮らしを恵む庭平面概略図

旧「いこいの花畑」



暮らしのモデルガーデンなので建物の面積は約30坪、庭の面積は約70坪とそれほど広くはありませんが、宿根草を中心として芝やキッチンガーデンのある庭を目指しています。また、庭のコンセプトからも単なる眺めるだけではなく、庭を訪れる方自身も楽しめる参加型のイベントを計画して

います。例えば庭のメンテナンス時に花の手入れの講習会を開催することや庭で採れた野菜を使った料理教室を開催するなど、利用の仕方について様々なプランを市民の皆様提供していきたいと考えています。

恵庭市フラワーマスター協議会とは？

フラワーマスターは、道内各地の「花のまちづくり」を推進するためにその中核となる人材を、市町村の推薦に基づいて北海道庁が認定するものです。「花の育成管理や街並み景観に配慮した植花に関する知識・技術を持ち、花のまちづくりのボランティアリーダーとして積極的に指導・助言できる方」が認定要件になっており、道内には約2,400名、恵庭市でも29名のフラワーマスターがいます。

恵庭市フラワーマスター協議会は、恵庭市のフラワーマスターによって構成された組織で、①恵庭の花のまちづくりに貢献する②会員相互の親睦を深め、情報の共有を通じ資質の向上を図る③花と緑の景観づくりに貢献する、という三つの目的に沿って活動しており、花とも写真展や写真講習会の他、花と緑に関する講演会・セミナー、花とくらし展への参加などの活動を行っています。

【花とも写真展】

恵庭市内の花を中心とした風景の美しさを再認識することによって、恵庭市民の財産である自然を守る意識を高めるとともに、恵庭市が誇るべき「花の街づくり」をさらに活性化して継続していくことを目的としており、恵庭市内の個人宅や公共・民間施設の花壇、花や緑のある風景をパネルにして市内各所で巡回展示しています。また、パネルに使用する写真も募集しています（詳しくは市役所花と緑・観光課にお問い合わせください）。



【花とくらし展への参加】

恵庭市の花に関する一大イベントである「花とくらし展」には花で作ったオブジェなどを毎回出展しています。写真は2019年に出品した写真撮影用の「軽トラガーデン」です。



【花の庭づくり無料出前相談】

恵庭市内でガーデニングを始めようとしている方、あるいは既に始めている方を対象に、フラワーマスターが相談者のご自宅に伺ってアドバイスや実際の技術指導などを行います。詳細・お問い合わせは市役所花と緑・観光課（33-3131 内線2525）まで。

講習スケジュール

講習回	1	2	3	4	5	6	7
月日	5月10日	6月14日	7月12日	8月9日	9月13日	10月11日	11月8日
オリエンテーション	恵庭の花のまちづくり						
	暮らしを恵む庭について						
	自己紹介						
	講習計画説明						
植栽レイアウト	植栽レイアウトの確認	植栽レイアウトの確認	植栽レイアウトの確認				
宿根草	春先の管理	宿根草の管理	宿根草の管理	宿根草の管理	宿根草の管理	宿根草の管理	
1年草		1年草花壇の作成	1年草の管理	1年草の管理	1年草の管理		
バラ	春先の管理	バラ苗の植え込み	バラの管理(切り戻し)	バラの管理	バラの管理(切り戻し)	バラの管理(剪定)	
クレマチス	春先の管理	クレマチス苗の植え込み	クレマチスの誘引	クレマチスの管理	クレマチスの管理	クレマチスの剪定	
球根類		グラジオラスの植え込み	チューリップ球根掘上げ		グラジオラス球根掘上げ	秋植え球根の植え付け	
キッチングガーデン			キッチングガーデン	キッチングガーデン	キッチングガーデン		
その他	種蒔きと育苗		病害虫対策	病害虫対策	挿し芽	花壇整理	越冬準備・総括

6月1日 水

6月15日 水

6月28日 火

7月19日 火

ハンギングバスケット講習会(サンガーデン)

キッチングガーデン講習会(暮らしを恵む庭)

寄せ植え講習会(暮らしを恵む庭)

キッチングガーデン講習会(暮らしを恵む庭)

庭づくりで大事なこと



●自分の庭の特性を理解すること

例えば恵庭と札幌では植物の育ち方が違います。恵庭市内でも恵み野と島松では気温も違い、花が咲く時期も異なります。そして自分の家の庭と隣の庭では育つ植物の種類が違う場合もあり、当然、自分の庭でも場所によって育つ植物の種類、あるいは育ち方が異なります。

○マイクロクライメイト(微気候)……陽当たり(日陰)・風(向きや強さ)→家屋の位置や形状、木の有無

○土壌……水はけ・酸度・腐植質の有無→地域差・住宅地になる前の土地の種別・造成時の工事仕様

●植物の特性を把握すること

○寿命……一年草・二年草・多年草(短命 or 長命)、球根(春植え&秋植え)

○高さ……植物の植栽位置を決めるのに重要

○湿度……湿気を好む or 乾燥を好む

○耐寒性……恵庭のハーディネスゾーンナンバー(耐寒性指標値)は 6a(札幌は 6b、旭川 5、函館 7a)

※植物(花)は生き物なので、子孫を残す種をつくるために花を咲かせます。そのため、種ができないように花(花殻)を摘むと、種をつくらうとして再び花を咲かせます。この性質は一年草で強く、多年草では弱い傾向があります。一年草で花殻摘みが大事な作業なのは、この理由に拠ります。また、一年草によっては草丈を短くする切り戻しが行われますが、これも同じ理由です。花にとって種をつくることは莫大なエネルギーを消費するので、種ができた(生き物としての使命を果たした)花は終末へと向かいます。

●庭のコンセプトを作ること

○どのような庭にするか

眺めて楽しむ庭、生活の一部としての庭、通りに面した部分や玄関周りを使う地域景観に配慮した庭など

○視点をどこに置くか

単(複)視点型→庭の中心や端、室内からの窓越し、道路など

散策路型(広い庭向き)



○一年草主体にするか、多年草主体にするか、それとも両方を組み合わせるか

一年草……カラフルな色のものが多く、花期も長いものが多い。比較的安価だが管理の手間が必要。

多年草……花期は短い種類によって花が咲く時期が異なるため季節感が味わえる。手間は少ない。

○色合い……様々な色を用いたカラフルな庭、パステル系の庭、青やピンク・白などの単色でまとめた庭。

○植栽方法……コンテナ(プランター)or 地植え or 組み合わせ

●失敗しても諦めないこと

せっかく植えた植物が育たなかったり、花が咲かなかったり、枯れてしまったり、イメージとは違ったり、ガーデニングは失敗と失意の連続です。初心者さんだけではなく、ベテランも失敗します。来年は違う育て方をしてみよう、この花は別の場所に移し替えよう……といった試行錯誤がガーデニングそのものだと思います。植物は生き物ですから成長もしますし、死にもします。そのような植物が織りなす庭の表情も年々変化します。ですから、ガーデニングに終点はありません。植物と一緒に生活し、ともに年を重ねていくことがガーデニングです。

●春先の庭の手入れ

庭に積もった雪が融けたらガーデニングシーズンが始まります。庭仕事で最初にするのは「清掃」です。

○バラや庭木の冬囲いを外し、折れた枝や枯れた枝を取り除きます。

○宿根草は冬越し前にはある程度は切り戻していますが、ほとんどの植物は越冬中に地上部が完全に枯れてしまうので枯れた茎や葉は取り除きます。庭木などの落ち葉も取り除きます。分解能が高い土壌であればこうした落ち葉などは放置しておいても1~2カ月で無くなり土壌改良にも役立ちますが、蛾の幼虫やナメクジ、ワラジムシなどの棲み場所になりやすいので取り除いた方が無難です。

○冬越し前に宿根草の間には腐葉土や牛糞堆肥などの有機質肥料を撒きました。これらの有機質は冬の間に分解され土壌中に浸みこんでいきますが、6月上旬頃には肥料分が消費されてしまいます。そのため、きれいにした宿根草の周りには改めて腐植質を補給します。冬越し前の施肥は4~5月の発芽と初期成長のため、春先の施肥は初夏から秋までの生長と開花のためと考えてください。

○施す腐植質は腐葉土が最も適していますが、これに牛糞堆肥や発酵鶏糞を加えてもいいでしょう。ただ、牛糞(リン酸とカリが多い)は施し過ぎると鉄・マグネシウム・カルシウム不足が起こりやすくなります。散布量は1㎡当たり3~4リットル程度にします。鶏糞は肥料分の効き目が早い一方で肥効は1カ月程度で無くなります。有機質肥料というよりも化学肥料に近いと思ってください。また、過剰投与は窒素分過多による植物の軟弱化や土壌のアルカリ性化をもたらします。牛糞堆肥と違って土壌改良には役立ちません。牛糞堆肥も発酵鶏糞も有機質だからと言ってやり過ぎないように。

○雑草取りも重要な作業です。春先に雑草(越冬した多年性雑草や発芽した多年生・一年生雑草)取りを頑張れば、以降の雑草取り作業は大幅に軽減されます。

●バラの剪定

○バラは冬越し前に軽い剪定(弱剪定)をしました。弱剪定にとどめたのは、北海道では冬の間に寒さによる枝枯れや雪による枝折れが起こるからです。春はこうした枯れた枝や折れた枝、黒く変色した枝を取り除き、また細い枝も取り除いたうえで深めの剪定(強剪定)を行います。

○バラの系統(次回の講習で説明します)や樹勢、年齢、枝数などにもよりますが、例えばシュラブローズでは前年と同じ高さで花を咲かせる場合は2/3くらい、前年よりも低い位置で花を咲かせる場合は半分くらいの高さまで切り詰めます(あくまでも目安です)。大きくしたい場合は3/4くらいの高さの剪定にとどめます。思い切って切り詰めても大丈夫です。例えば1/3~1/4の高さまで切り戻しても、茎の下部や地際から芽が出てきます。古い枝が多い場合や姿が乱れている場合は思い切って切り詰めてみましょう。

○剪定は芽の上5mm~1cmで行います。芽と芽の中間で切ると切り口の下部分が枯れて見苦しくなります。また芽の直上で切ると芽そのものが枯れてしまうことがあります。

○比較的高い位置で剪定する場合、一番上の芽は外側を向いているものを残してください。一番上の芽が中を向いていると枝が中側に伸び、株の姿が乱れます。二番目、三番目の芽は中を向いていても構いませんが、枝数が多くてたくさん芽があるようでしたら芽掻きをします(枝が混みあうのを防ぐため)。若い株や枝が少ない株の場合は芽掻きの必要はありません。シュラブ系の大株でも芽掻きは必要ありません。

○剪定は4月中旬~下旬に芽が膨らみ始めたのを確認してから行います(枝の上部に付いている芽は枯れている場合が多いので)。芽が動いて葉が展開し始めてから剪定しても大丈夫です。

●種まきと育苗

加温温室といった施設がない限り、北海道での種まきは総て春(4～5月)に行います(ビオラやパンジーなどように耐寒性の強いものは家庭でも秋蒔きできるものもあります)。

○自分で育苗するメリット

1. お財布に優しい：これが最大のメリットですが、種まき育苗グッズ代、育苗用土代、種代も入れて1苗あたり30～50円で苗を作ることができます。たくさん作ればそれだけコストも下がりますし、自分で採った種を使ってコストダウンすることも可能です。大凡ですが、園芸店などで販売されている価格の1/3～1/5で苗を作ることができます。極端な例では通販サイトで宿根草の大株を購入すると送料込みで1株2,000～3,000円のが40円程度で済みます(1～2年かかりますが)。1年草100株を購入しようと思っても価格を考えると二の足を踏みますが、自分で育苗すれば100株でも200株でも思いのままです。
2. レアな花を咲かせることができる：近くの園芸店はもちろん、通販でもなかなか目にできないような花でも種さえあればOKです。
3. 愛情：自分で種をまいて育苗した花ですから、とても愛着が湧くようになります。枯らさないように気をつけるので観察力が増し、ひいてはその花だけでなく庭全体の状態を把握することに繋がります

○デメリット

1. 時間と手間が必要：種まきと育苗には管理する手間と時間がかかります。どちらかと言うと「マメ」な性格の人向きです。実際に育苗してみると、お店で売られている花苗の価格の大部分が人件費であることが理解できます。

○種まきの方法

1. 直播(じかまき)：種を地面に直接まく方法で、中くらい～大きな種をまく時によく行われます。地面全面にパラパラとまく「バラまき」、溝を作ってまく「条まき(すじまき)」、1カ所に2～3粒ずつまく「点まき」があります。育苗グッズを必要としないのでコストはかかりませんが、発芽苗を間引きする手間がかかります。また、発芽が安定しない、好光性の種をまく場合は覆土しないので蟻に持っていかれる、発芽までの日数が長いものは雑草に負けてしまうなどのデメリットがあります。
2. ポットまき：ポリポットに用土を入れ、種を点まきして発芽させ、そのまま育苗する方法です。雑草が生えないように市販の培養土や種まき用土、育苗用土を使用します。種まきから植え込みまで一貫して行えるメリットや、移植を嫌う植物を育苗できるメリットがありますが、スペースが必要、発芽しないポットは無駄になるなどのデメリットもあります。なお、ポリポットの代わりにココヤシなどを原料としてそのまま植え込みができる「ジフィーポット」などの商品も市販されています。ジフィーセブンは吸水させて膨らませて使用するタイプです。ジフィーセブンは用土を必要としませんが1枚30円程度と比較的高価です。
3. 箱まき：木製の箱やプラスチックなどのトレイに用土を入れて種まきし、発芽した苗をポットに移植して育苗する方法です。ポットまきの作業工程のうち発芽までの管理スペースを少なくできる、大量に発芽させることができるなどのメリットがあります。
4. ピートバン：箱まきの種まき用土の代わりにココヤシ繊維とピートモスを原料としたピートバンを使うものです。ジフィーセブンのように吸水させて使用します。特に小さい種や微細種をまく時に便利です。1枚180円とやや高価なのが難点ですが、使い慣れると便利です。講習材料として紹介します(詳しい使い方は別の資料を参考)。

○育苗用土

育苗用土が市販されていますが、手に入らない場合は市販の培養土で構いません。ただし粒径の大きいものは避けてください。私は自分で積んだ腐葉土を篩に通して使っていますが、足りない場合はホームマックの「花と野菜のかる～



い培養土」(25 リットル税込 547 円)とジョイフルの「花と野菜の土」(14 リットル税込 217 円)を 2:1 の割合で混ぜ、牛糞堆肥を少量足して使っています。「花と野菜のかる〜い培養土」だけでもいいのですが、乾くと水を弾く傾向があるので、「花と野菜の土」を混ぜています。なので、混ぜる土は普通の黒土でも構いません。この組み合わせ(牛糞堆肥も含めて 40 リットル)で 9cm ポット約 100 個分の土を賄えます。

●宿根草(多年草)の植え方

今回の講習では宿根草の植え込みは行いませんが、宿根草や一年草に限らず花苗の植え込みは基本です(次回の講習で一年草花壇を作成してもらいます)。

○宿根草苗の根鉢(土が付いた根全体のこと)の大きさよりひと回り大きい植穴を掘ります。

○一年草と違って植穴に肥料は施しません。「マグアンプ K」や「花工場」などの根に触れても障害が起きないものであれば、植穴の土に混ぜても構いません。育ち具合にもよりますが普通は春と秋に株の回りに肥料あるいは腐葉土などの有機質を土の上に施します。

○ポットから出して根鉢を崩さないようにしますが、根がびっしりと回っているようであれば少し土を落として根をほぐす、あるいは根を少しカットします。

○植穴に株を入れ、土が乾いているようであれば半分くらい土を戻して灌水、さらに土を戻します。

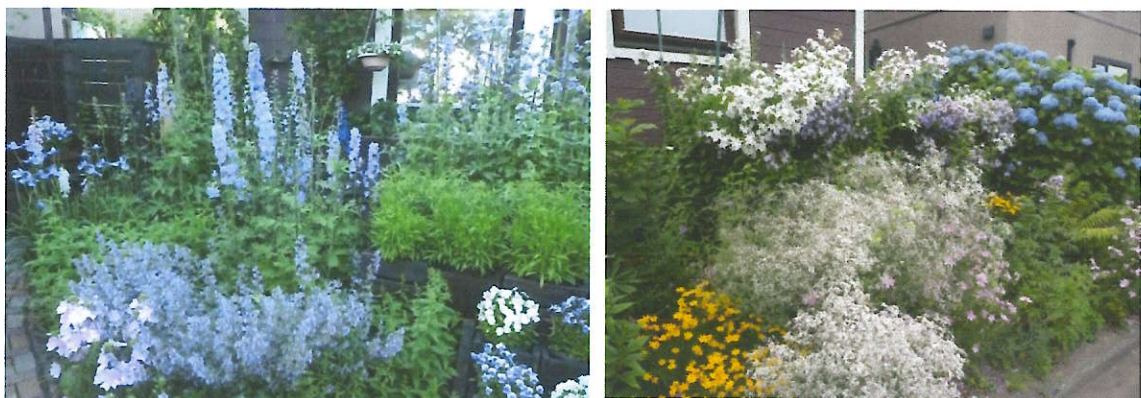
○株の地際(と思しき部分)をグラウンドレベルと合うように土を軽く押さえて固定しますが、少し窪みを付けた方が仕上げの灌水がしやすいです(水鉢)。なお、宿根草に限りませんが「深植え」と「浅植え」にならないように気をつけましょう。

○背が高くなるものは後ろに、背が低いものは手前に植えます(植栽レイアウトの基本)。

○お店で売っている宿根草苗の植え付けはいつでもできますが、真夏は避けた方が無難です。背丈や株径など、成株になった時のサイズをイメージして植栽します。同じ種類を複数植える場合、植え付け間隔は成株の株径くらいにすると大きくなった時に隣同士で葉が触れ合う程度になります。

※一般的に植物はお互いの間隔が狭いとお互いに競い合って成長する性質があります。これを利用して密に植え、成長と開花を早めることもできます。この方法は雑草の繁茂を抑制する効果もありますが、一方で蒸れやすい、病気が伝染しやすい、他の植物に負けてしまうものが出るなどの欠点もあります。また、植え替えを嫌う植物(直根性のものが多い)もありますので、そのような植物は最初に植える場所を慎重に決める必要があります。

○なお、既に植えてある宿根草の植え替えは、冬に備えた休眠期に入る秋(10 月頃)か、芽と根が動き出す(新しい細根が出て、それから芽が出ます)前の春(4 月頃)に行うのが普通です。それ以外の時期(真夏を除く)でもできますが、大型種は成長しているので実質的に無理です。



宿根草の植え付け例です。後ろに背の高い植物を、手前に低い植物を植えると調和がとれて見やすい花壇になります。左の写真の植栽植物は後:デルフィニウム・ジギタリス・マルバなど、中:モナルダ・アイリス・ネペタ(キャットミント)など、前:ムスクマロウ・カンパニュラ・ゲラニウム・シラーなど。右の写真の後:カンパニュラ・アジサイなど、中:宿根かすみ草・フロックス・ルリタマアザミ・ムスクマロウなど、前:コレオプシス・西洋オダマキなど。花が咲いているものと咲いていないものがあります(花が咲く時期が違う)。

●バラを植えてみよう

庭にバラを植えてみたいと思う方は多いでしょう。「でも、難しいんじゃない?」「病気が多いって聞いたけど…」などと二の足を踏む方もいます。しかし、要点を抑えればバラの栽培は難しいものではありませんし、バラがあると庭の雰囲気も明るくなります。



○バラの種類: 樹形分類や園芸分類などいくつかの分類方法がありますが、複雑ですでおおまかな分類を示します。庭に植える時のご参考にしてください。

【野生バラ】いわゆる野バラ

【オールドローズ】1867年以前からあった原種系で、一季咲が多い

【モダンローズ】1867年以降に作出されたもので、四季咲が多い

【モダン・ブッシュ(木立ち)】ハイブリッド・ティー(HT): 大輪で八重咲、花数は3個

フロリバンダ(F): 中輪で平咲~八重咲、房咲が多い

【モダン・シュラブ(半つる)】シュラブ(S): 様々な性質を持つ

イングリッシュ・ローズ(ER): デビッド・オースチンが作出

【モダン・クライマー(つる)】つるバラ(CL)や修景バラ(LS)

○鉢植え苗を植え付ける時は、直径40cm×深さ40cm(50×50が望ましい)の植穴を掘り、腐葉土や牛糞堆肥(発酵油粕でも可)を入れて1/3くらい土を戻してよく混ぜ合わせます。残りの土にも腐葉土や堆肥を混ぜ込み、穴に戻して深さを調整。根鉢を崩さないようにして苗を穴に据え付け、土を戻します。この時、苗の「つぎ口」も埋まるように植えます。あとは土を踏み固め、水鉢を作って灌水するだけです。

※バラは野イバラの台木に接ぎ木して苗を作ります(耐病性を高めるため)。この接ぎ木部分を「つぎ口」と呼びますが、つぎ口を地中に埋める理由は防寒とカミキリムシの被害を防ぐことです(北海道ではカミキリムシの被害はあまりありません)。つぎ口には「つぎテープ」が巻いてありますので、剥がしてから植えます。

○鉢植え苗の植え付けは春から秋までいつでもできますが、春に販売されているものは園場から掘上げて鉢植えにされたばかりのものが多く、根が十分に発達してから植えます。目安は鉢底から根が出る、あるいは一番花が終わる頃です。植える場所は陽当たりの良いところがベストです。

○複数のバラを列植する場合は、成株の株径プラス20~30cmの植え付け間隔にするとおのびのびと育てることができます(普通のバラ園)が、狭い庭では株間40~50cm程度でも構いません。違う品種のバラの枝が絡み合って複雑な色模様のバラを楽しむことができます(上の写真右)。また、大阪府泉南市のデビッド・オースチン・ローズズでは同じ種類のバラ4株を40~50cm四方間隔で植えていますが、1株植えよりも大きく、こんもりとした樹形になります。でも、初心者の方はのびのび育てましょう。

●クレマチスを植えよう

クレマチスは上級者用の花と思われがちですが、実は管理も楽で、ガーデニングを始めたばかりの方でも扱える植物です。

○ガーデニングによく使われる系統(苗を買う時にラベルに～系と書いてあります)

【モンタナ系】春に咲く一季咲き、旧枝咲き(前の年に伸びた枝に花が付く)

【早咲き大輪系(パテンス系)】四季咲きで新旧枝咲き(前年の枝と新しく根元から伸びた枝に花が付く)

【遅咲き大輪系(ジャックマニー系)】四季咲きで新旧枝咲き

【ビチセラ系】四季咲きで新旧枝咲き

【テキセンシス系】四季咲きで新枝咲き(春に地際から伸びた枝に花が付く)

【インテグリフォリア系】四季咲きで新枝咲き、比較的草丈が低くて誘引が楽

【フロリダ系(テッセン系)】返り咲きで新旧枝咲き

○四季咲きのものは花が終わった後に全体の 1/3～半分くらい切り戻すとまた枝が伸びて花が咲きますが、恵庭では花が咲く前に寒くなってしまうので一季咲き(あるいは返り咲き)として考えた方がいいでしょう(早咲き大輪系であれば花の盛期をやや過ぎた時点で切り戻すと2番花を見ることが可能です)。

○旧枝咲きのモンタナ系以外は地際あるいは地際から 1～2 節残して全部刈り取って冬越しさせます。早咲き大輪系も新旧枝咲なのですが、旧枝咲きの性質が強いので2～3 本旧枝を残す方が良いでしょう。

○つる植物なので 2.5～3m あるいはそれ以上に伸びます。従って、フェンスやアーチなどつるを絡ませるものが要になりますが、造作やつるの誘因が面倒な方にはバラや低木に絡ませる方法もあります。

○幼苗時の成長が緩慢なので、苗を買うときはできるだけ大きなものを購入します。3 年生苗であれば植えた年に花が咲きます。

○植え付ける場所は、バラと同様に陽当たり・風通し・水はけが良いところが最適です。根鉢の高さの 3 倍くらいの深さの植穴を掘り、バラと同様に腐葉土や堆肥を混ぜて植え込みますが、地際から 1～2 節まで埋まるように深植えします。節が地中にあることでそこから発根し、また新しい芽も地中の節から出て株立ち(何本も茎が出ている状態)になるからです。鉢植えにする場合も同様に節を埋めるため、深さのある鉢を使うようにします。

○園芸書ではクレマチスを植える時の間隔は 50cm 以上と書かれているものが多いですが、30cm でも全然問題ありません。それどころか、ひとつの植穴に 2 株を一緒に植え、成長と開花を早めるというウルトラ C 技もあります(この方法を用いる時は同じ品種を植えることを推奨)。植物の成長競争を利用する方法は、他の宿根草や一年草でも応用できます。



●一年草花壇を作ろう

一年草でウェルカム花壇を作ります。

○一年草は宿根草と違って花期が長いものが多い(6月から10月まで咲いているものもあります)、様々な花色があるためにカラフルな花壇あるいは色が統一された花壇を手軽に作ることができます。一方で花期が長いということはそれだけ管理の手間がかかるということです。また、植える花の種類が少ないと花期の違いがないために同じ風景が長い間続くことになります(成長による景観の変化はあります)。そのため一般ガーデナーさんの多くは、宿根草と組み合わせたり、色々な種類の一年草を植えたりして時期による変化を作りだしています。

○耐寒性が弱いものが多いため、北海道では秋から冬あるいは春にかけて種まきされ、温室で育てられたものがお店で販売されています。かなり早い時期でも寒さに弱いものが出回っていますが、十分に気温(地温)が上がってから植えるようにしましょう。

○植え付け方法は宿根草に準じます。花期が長いので、植える場所は栄養分の多い場所にしましょう。植穴には緩効性の肥料を入れます(ここでは肥効が長期間続くマグアンプを使います)。植える間隔は宿根草の場合よりも狭くします。植栽期間が2~4カ月と短いので植栽密度が高まることによる弊害をあまり気にしなくてもいいこと、少し密に植えた方が見栄えがすることなどが主な理由です。でも、限度というものがありますけれど……具体的には宿根草の場合の「成株になった時に葉が触れ合う間隔」よりも若干狭くする程度です。

○一年草は余程の事が無い限り、一度植えつけると移植はしません。従って、花苗の配置と植え込みは十分に考えて行うことが大事です。



●植え付け後の水やり

- 植え付ける時にしっかりと水やりすれば、雨が降らなくても1週間～10日は水やりする必要はありません。過度な水やりは土の温度を下げてしまい、苗の活着(しっかりと根付くこと)を遅らせてしまいます。
- 雨が長い間降らない場合は灌水を行います。苗と苗の間や通路などにバケツなどを使ってたっぷりと水を撒きます。散水シャワーなどによる短時間の散水を繰り返すことは、土の表面を湿らすだけで地温を下げてしまうので百害あって一利なしです。
- 気温が高い時期の灌水は朝か夕方に行うようにします。日中に行うと植物が蒸れたり、また冷たい水を大量に与えると地温が急激に下がり、温度差によって根が断裂することもあります。特に土の量が少ない鉢植えでは注意が必要で、1日以上汲み置きしておいた水を与えるようにしましょう。

●球根を植えてみよう

球根には春植え球根と秋植え球根があります(ヒガンバナなどの夏植え球根もあります)。

【春植え球根】耐寒性が弱い球根で、5～6月に植え、7～9月に花を咲かせます。秋には地上部は枯れて休眠期に入りますが、北海道では冬季に凍死するので秋に掘上げてしまいます。あまり早くに植えつけてしまうと低温で球根が腐ってしまうことがありますので、地温が十分に上がってから(15℃以上)植えるようにします。ダリア・カラー・グラジオラスなど。

【秋植え球根】10月頃に植え付け、5～8月に花を咲かせます。6～8月には地上部が枯れて休眠します。チューリップ・スイセン・ユリなど。耐寒性の強いものが多いですが、園芸雑誌のカタログなどでは南アフリカや南米原産の非耐寒性のものが販売されていますので注意が必要です。

○球根を植える深さは、球根の高さの2～3倍を目安にします。植え付け間隔も球根の幅の2～3倍です。鉢に植える場合は深さ・間隔とも球根1個分くらいにします(深植えしてしまうと根が十分に張れないので倒伏してしまうことが有ります)。

○球根から出る根は、植物体の保持とともに水分や肥料分を吸収する役割を持っています。従って、肥料は球根の下に施します(ユリは異なります。詳しくは秋植え球根の植え付けの時に説明します)。

○球根は芽が出る方(尖がっている)を上、根が出る方(平べったいあるいは古い根が付いている)を下にして植え付けますが、種類によってはどちらが上なのか分からないものもあります。その場合は横にして植えつけます。

○地植えの場合、植え付け後に灌水する必要はありませんが、晴天が続くようでしたら一度たっぷりと灌水します。

●クレマチスの誘引

○クレマチスは放任栽培でも支柱や植木、フェンス、トレリスなどに蔓が絡みついて成長していきますが、蔓と蔓が絡み合ったり、地面に倒れたりするので誘引と結索を行います。

○また、植物には頂芽優勢(ちようがゆうせい)といって先端(上部)の芽が優先的に伸び、側枝の成長が抑制されるという性質があります。ツルバラやクレマチスは側枝や脇芽に花が咲きますのでこの頂芽優勢という性質を逆手に取り、枝を水平にしてあげれば側枝や脇芽がたくさん伸びて(上になって優勢になるから)花をたくさん咲かせることができます。従って、蔓は水平や斜めに誘引します。

●宿根草の管理

- 最初に、葉が萎れていないかあるいは変色していないか、新芽や蕾にアブラムシが付いていないか、葉や花、蕾や種莢が食害を受けていないかなどを確認します。該当する場合の対処法は次回の講習で説明しますが、この確認(観察)は少なくとも週に1回、可能であれば週に2回行います(異変があった場合の対処は早ければ早いほど効果があります)。
- 宿根草の花殻をどうするかはケースバイケースです。植物体が小さい場合、花殻は取り除いて株を充実させるようにします(種を付けさせずにエネルギーを生長に振り向けさせる)が、ある程度の大きさに育った株の場合は花の種類によって処置が異なります。ゲラニウムのように花殻をこまめに取り除くと比較的長期間次々と花を咲かせるもの、デルフィニウムのように花が終わった花茎を切り取ると2番花が株元から立ち上がってくるもの、カンパニュラやモナルダのように花殻を花首(花の直下)で切り取るとその下の葉の付け根から脇芽が出て再び花を咲かせるものなど様々なタイプがあるので、植栽している植物の特徴を把握することが重要です。
- 宿根草のなかには種莢(シードヘッド)を付けさせて鑑賞するものもありますが、基本的には種を採る目的がある場合以外は花殻を除去するようにしてください。花後の肥料(お礼肥)は株が目に見えて弱っている場合以外は必要ありません。



写真左は花殻摘みをしたアキレギア(西洋オダマキ)、右は種を付けさせたアキレギア。同じ日に写真を撮影したのですが、花殻摘みをする・しないでこれだけの差が出ます。

●一年草の管理

- 宿根草と同じように確認(観察)は重要です。
- 一年草の花期は短いものでも3週間程度、長いものでは2~4カ月になりますので花殻摘みは必須です。花殻摘みをする場所は花殻のみ、花首、花茎の途中、花茎全部など種類によって異なります。小さい花を沢山咲かせるものは花茎を1本1本切り取ることをお勧めしますが、アリッサムやネメシアのように花茎の数が多くて大変だという面倒くさがり屋さんの場合は株全体を半分くらいの高さに切り戻してしまう方法でも構いません。この切り戻しは高温多湿な夏の前に行うとよいと言われている方法ですが、その意味では恵庭では行う必要はありません。ただ、生長が良く茂り過ぎた場合や雨が何日も続く場合には蒸れによる枯れ込みを防止するために有効な方法です。
- 花期が長く、花をたくさん咲かせるため肥料切れには注意が必要です。特に鉢植えでは元肥を多めに与えても花を咲かせるために必要なリン酸が欠乏することがあります。葉の色が薄くなったり、花が小さくなるようならハイポネックスなど市販の液体肥料を与えます。規定よりも5~10倍に薄めて毎日の水やり代わりに与えても構いません。地植えの場合は地力次第ですが、やはり花が小さくなったり切り戻したりした場合は液肥を与えることがあります。

●バラの管理

○枝の切り戻し： 1 番花が終わったら、2 番花を咲かせるために切り戻しを行います。花殻の下方にある 5 枚葉(葉が 5 枚ある葉柄、種類によっては 7 枚葉)の 5mm くらい上で枝を切りますが、どの 5 枚葉を切るかは好みです。上の方で切ると 2 番花は概ね高い位置で、下の方で切ると概ね低い位置で咲きます。「概ね」なのは、上方で切ると比較的勢いの弱い新梢が、また下方で切ると勢いの強い新梢が出る傾向があるからです。ただし、あまり下の方の茎が太いところで切ると新梢が出ないこともあり、茎が細い上の方でカットした方が 2 番花は咲きやすいです。2 番花が咲く新梢は、カットした直下の 5 枚葉葉柄の根元から出て来ます。従って、カットする場合は外側に向いている 5 枚葉の上で行います。内側に向いている 5 枚葉でカットすると新梢は内側に伸びるため、株の姿が乱れます。

○シュートの処理： 6 月中旬から 7 月にかけて勢いが非常に強い新梢が出てきます。主枝の下部途中から出てくるサイドシュート、地際から出てくるベーサルシュート、ともに翌年の主枝になる大事な枝です。サイドシュートはそのまま放置しておいても構いませんが、ブッシュ系のバラ(ハイブリッドティーやフロリバンダ)のベーサルシュートは放置すると低めの位置でたくさんの花を箒状に咲かせてしまいます。葉の数が少ないため、花を咲かせるとシュートの生長と充実に影響が出てほとんどのものは冬季に枯れてしまいます。そこで、ベーサルシュートは 30~40cm くらいに伸びた時に頂芽から 5~6cm のところでピンチ(カット)してしまいます。そうするとピンチした部分から芽が出て、再び生長を始めます。シュラブやツルバラの場合はベーサルシュートを放置して花を咲かせても問題ありません。



ハイブリッドティーのベーサルシュート



フロリバンダのベーサルシュート



シュラブのベーサルシュート



ノイバラ台木から出たシュート

慣れないと写真のようにピンチしてもいいシュートなのかどうか見分けがつかない場合が多いので、そのバラの系統がブッシュ(ハイブリッドティーor フロリバンダ)なのかシュラブなのかを把握しておく必要があります。なお、葉の形や色が少し変わったシュートが地際から出てくることがあります。これは台木に使っているノイバラのシュートです。本来のバラの樹勢が衰えた時などに出易く、放置しておくと株全体がノイバラに変わってしまいますので、見つけたら根元から取り除きます。

○ブラインド処理: バラは普通、5枚葉(7枚葉)の先に3枚葉が出て、その先に蕾が出て花が咲きますが、5枚葉ばかりで蕾が出ない枝が出る場合があります。これをブラインドと言って、いつまで待っても花は咲きません(写真左)。また「出開き」と言って、枝から芽が出たものの数cm伸びただけで生長が止まってしまう芽もあります(写真右)。これは様々な原因により、バラ(あるいはその枝)が花を咲かせない道を選んだ、あるいは咲かせられない状態にあるということです。地植えバラでも見ることができますが、生育条件が良くない鉢植えで発生することが多いようです。ブラインドは放置しても問題はありません。どうしても花を咲かせたいという場合は適当な5枚葉の上でカットすると新梢が出て花を咲かせることができますが、必ず咲くとは限りません。出開きは放置しておいても構いませんが、葉が混んでくるようでしたら風通しを良くするために取り除きます。



○新苗の管理: 春に店頭で販売されているバラ苗は、株の大きさや枝の細さの割にはたくさんの花が咲くように仕立てられています。繰り返しこのテキストに書いているように、花を咲かせることは植物に少なからずダメージを与えます。特に株が小さいうちはその後の生長に大きな影響が出ますので、本来なら植えた年は花を咲かせずに株を大きくすることをお薦めします。でも、折角買ったバラだし...どんな花が咲くか見てみたいし...と思うのが人の性(私もそうですが)。そういう場合は、特に房咲きの系統では一枝に咲く花の数を1~2個にして、その他の蕾は取り除いてしまいましょう。翌年のために我慢です。

●秋植え春咲き球根類の処理

○春に花が咲き、花首で花殻を落としたチューリップは6月下旬から7月上旬にかけて葉が枯れて休眠期に入ります。球根は掘上げて乾燥させ、秋の植え付けまで涼しいところで保管します。植え放しだと分球によって良い花が咲かなくなりますので、球根は2年に1回、できれば毎年掘上げて植え直すようにします。

○スイセンやスノードロップス、シラー、ヒヤシソイデス(シラーカンパニュラータ)なども7月には休眠期に入り、葉が変色してやがて枯れます。腐って分解されてしまうので放置しておいても構いませんが、暫くの間は汚く見えますので地際から葉を刈り取る(抜き取る)と見栄えが良くなります。これらの球根は3~4年植え放しで構いません。なお、これらの球根類の多くは乾燥を嫌うので、掘上げは植え直しをする直前に行うようにします。

●庭全体の管理

○モサモサ庭になる原因と対処： 気温が高くなって雨も多くなると、どんな庭でもある程度はモサモサになります。モサモサになるという事は植えてある植物がしっかりと生長しているという事で、それだけ地力があるという事です。肥料分のない庭ではあまりモサモサになりません。一方で、モサモサの割には花の咲き方が悪いという場合は窒素分過多なので施肥は控えめにするか、行わない方が良いでしょう。また、植栽密度も関係します。植栽密度が低ければ植物は横方向にも広がりますが、植物の間隔が広いのであまりモサモサ感は出ません。植栽密度が高い場合、植物は上方向に伸び、やがて自重に耐えられなくなって茎全体がしな垂れるためモサモサ感が強くなります。

モサモサ感を出さないためには植栽植物の種類を少なくして密度を低くする他、葉が大きいものや茎が細いものの植栽を少なくし、茎が硬くて倒伏しにくいものや背丈が低いものを多用することもひとつの方法です。植栽レイアウトでは背が高くなるものは後ろに、低いものは前に植える後高前低が基本ですが、敢えて背が高くなるものや株張りが大きいものを中段や前面に植えることもあります。これは植栽に変化をつける目的なのですが、無計画に行くとモサモサ感を助長します。後高前低の基本は花を見易くするためなのですが、モサモサ感を軽減する効果も大いにあります。

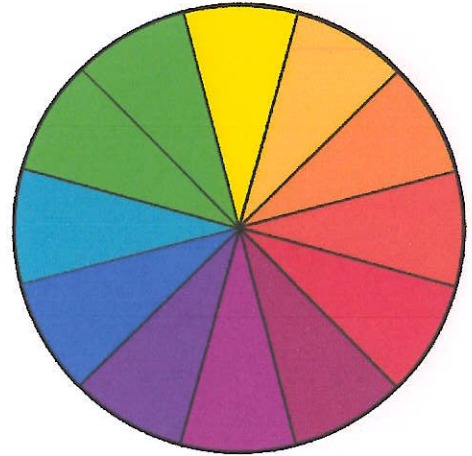
既にある程度出来上がっている庭でモサモサ感を何とかしたい場合は、秋に株分けして株のサイズダウンをする、春に芽をあるいは成長期に葉や茎を部分的に掻き取って生長を抑制するなどの方法があります。また、支柱と紐で植物の立ち姿をコントロールすることも有効な方法で(下のゲラニウムの写真:左は紐なし、右は紐張りによる整姿)、雨風による倒伏もある程度は抑えられます。



○作業通路： ガーデニングを始めたばかりの方は庭を有効に利用しようとして全面に植栽しがちです。散策路型の庭であれば、鑑賞用通路イコール作業通路なので問題はないのですが、ボーダー花壇や平面花壇の場合は植えた植物の総てに手入れができるように作業通路あるいは踏み込みスペースは必ず設けるようにしましょう。作業通路が何本かあるだけで、上記のモサモサ感はかなり軽減されます。

●カラーコーディネートと植栽植物の選定

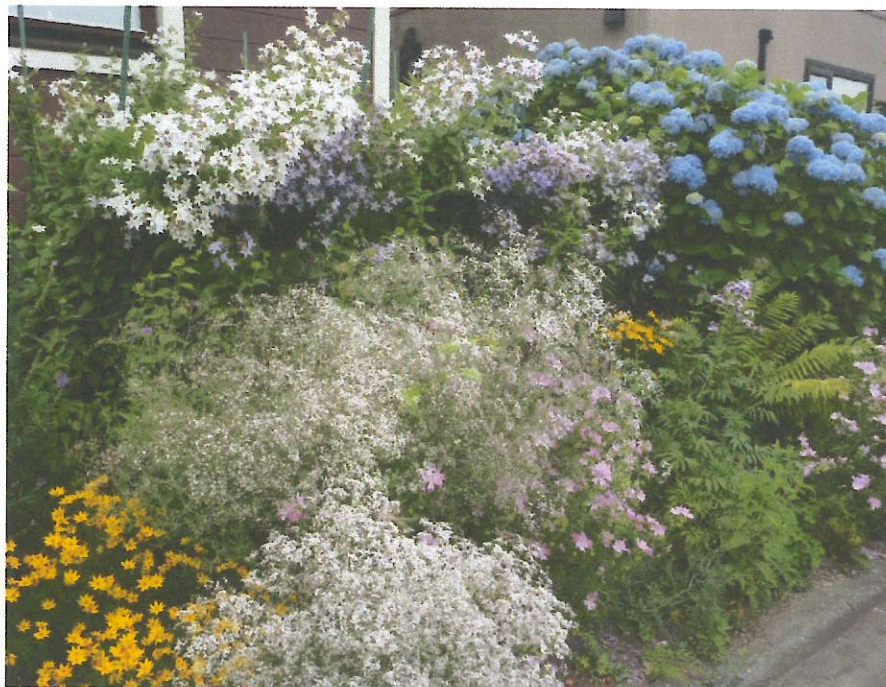
○カラーコーディネート： 図の色相環(カラーホイール)に示された補色(混ぜると白や灰色、黒といった無彩色になる色、反対色)の組み合わせはハイコントラストになります。例えば黄色と紫、青とオレンジや赤との組み合わせです。補色を多用すると生き生きとした躍動感が出ますので公園花壇などによく使われます。同系色を多く使うとグラデーションカラーが落ち着いた雰囲気演出します(ブルーガーデンやホワイトガーデン、ピンクガーデン)が、赤やオレンジ系は例外でこれらの色でまとめると色彩感が強い派手な庭になります。なお、補色の組み合わせにおいて例えば青と赤系を例にとると、たくさんの赤い花の中に青い花を少し混ぜると青い花が赤の強さを和らげて全体を落ち着かせる効果があります。逆に多くの青い花の中に赤い花を少し混ぜると青が赤を際立たせる効果になります。



○花の大きさ： パラや大輪ダリア、ユリ、クレマチス(大輪系)などの花が大きいもの同士を組み合わせると豪華な外観になり、カスミソウやカラミンサ、ガウラなど小花がたくさん咲くもので統一すると静かな雰囲気になります。両者を組み合わせるとお互いを引き立てあって調和がとれたものになります。

○花(植物)の形： 背丈の高低の他に、水平方向に広がるものや垂直に立ち上がるもの、枝垂れるものなど植物の姿は様々です。例えばジギタリスやデルフィニウムなどのように長い花穂を立ち上げる花だけを植栽してもそれはそれで面白いのですが、単調になりがちなので庭の一部での植栽にとどめ、様々な形の植物を配置した方が庭全体としては調和が生まれ、かつリズムがある庭になります。

○例えばアジサイとの組み合わせ具体例： 組み合わせる植物はアジサイの大きさ、花色によって異なり、またアジサイをメインにするかサブにするかによっても異なりますが、ここでは大株で青のアジサイの例を写真に示します。組み合わせている植物はカンパニュラ・ラクティフローラ(小花、白・薄青・青)と宿根かすみ草(小花、白)、コレオプシス(中花、黄)、ムスクマロウ(中花、ピンク)です。これらの花が終わるとフロックス(小花の集合体、白・ピンク)、ルリタマアザミ(中花、青)、モナルダ(中花、ピンク・ラベンダー色)が咲きます。



大きな花が無いのは、アジサイは小花の集合体なのですが遠目には大きな花に見えるので調和を取るためです。白色や薄い青色の花が多いのも落ち着いた雰囲気を出すためです。黄色のコレオプシスはアクセントとして入っていますが、もう少しピンクを多くしても良いかもしれません(ピンクはどちらかと言えば紫に近い色なので、どんな色にも適合します)。一方で、遅れて同じ小花が集合して球状に咲くフロックスやルリタマアザミを植栽したのは、雰囲気を変えるために同じく球状に咲くアジサイの花姿に合わせて面白さを出そうと思ったからです(結果は・・・思ったよりも素敵ではありませんでした)。

ここに赤の大輪バラを入れたらどうなるでしょうか？ダイナミックさは出ますが青や白とコントラストが強くなり過ぎるような気がします。赤よりはピンクやアプリコット系のバラを入れた方が華やかさも出ますし、調和も取れます。赤色系のバラに拘るのであれば修景バラなどの小輪系ならバランスは保てるでしょう。アジサイが青ではなくピンクの場合はどうでしょう？白い花の部分をピンクに変えてもいいですし、赤やオレンジの花をもう少し多くしても調和は保たれると思います。白のアナベルの場合は、青やピンクを多くしてもいいかも知れません。結局は庭主さんの感性と好みの問題ですが、花の色と花の形、大きさ、高低、コントラスト、調和、リズム感などを考えながら2～3年後の姿をイメージして植栽を行います。気に入らなかったら変えればいいだけの話です。なお、普通のアジサイではなくガクアジサイの場合は、花色がなんであれ、花が少なくて脇役タイプになりますのでどのような植物と組み合わせてもバランスが保てます。

今日の実習

庭づくり講習第4回 8月9日

●夏の植物管理

- 一年草では花期が終わったものも出てきますが、秋まで咲くものも多いので花殻摘みはこまめに行います。アリッサムやペチュニアなどのように10月まで咲くものは、徒長していれば半分くらいまで切り戻しをします。高温時の液肥の撒布は控えますが、8月下旬を過ぎると気温も下がってきますので鉢植え・花壇とも液肥の投与を再開します。なお、寿命を終えたものは病気の発生源になりますので抜き取って処分するようにします。
- この時期には、大部分の宿根草は最大成長点に達していますし、秋に花を咲かせる植物以外は来年のために体力を養う時期になります。花殻を摘むのはもちろんのこと、成株以外の場合はシードヘッド(種莢)の鑑賞もできるだけ避けるようにします。また、病気も多発する時期なので葉や茎の状態をよく観察して、異常があるものは取り除くようにします。
- バラは2番花が終わる時期です。秋の3番花に向けての切り戻しを行います。体力が落ちている時期ですし、病気によって葉が少なくなっている場合もあります。その場合は3番花を無理に咲かせず、2番花は花首で落とすなどできるだけ葉を残して体力回復に努めます。

●病気と対策

植物の病気の大部分は細菌ではなく糸状菌というカビが原因です。糸状菌は菌糸や胞子を作って増えていきますが、特に胞子は飛散するうえに水分を得て発芽するものが多いので、雨や多湿といった条件下で発病しやすくなります。糸状菌は土壌中にいるため、糸状菌の栄養源になる植物残渣を取り除くことが重要です。窒素肥料過多も糸状菌増殖の原因になります。生物学的にはバランスの取れた微生物叢(びせいぶつそう、微生物フローラ:様々な微生物がいる状態)であれば問題はないのですが、バランスが崩れて病原糸状菌が多い土壌だと病気が発生しやすくなります。そのため、多くの微生物が共生している完熟堆肥の漉き込みによる土壌改良が病気の予防には効果的です。また、石灰も土壌改良に効果がありますが、土壌酸度がアルカリ性になりやすく、土壌も固くなりがちなので多用には注意が必要です。なお、カニ殻を砕いて土壌に混ぜるとキチン質を分解する放線菌が増え、糸状菌のキチン質も分解してくれるので病原糸状菌の抑制に効果があると言われています。

○黒星病(黒点病):バラの他、バラ科の果樹(リンゴ・ウメ・ナシ・モモなど)の果実にも発生します。バラにとっては最も被害の大きい病気です。土壌中の糸状菌が雨や灌水によって舞い上がり、バラの茎や葉に着生することによって感染します。葉の場合、最初に小さな黒点が1~2個現れ、その後黒点が大きくなる(黒星状)とともに数が増大し、やがて葉が黄変して落葉します。病原糸状菌の胞子は水分で発芽しますので、雨によって感染が拡大し、株全体に広がっていきます。黒星病によって枯れることはありませんが、病状が進むと葉が全部落ちてしまうため生育が完全に止まってしまいます。また、枝に発生した場合は枝全体に広がり、枝が枯れてしまうこともあります。発生初期であれば薬剤の撒布で病状の進行を止めることもできますが、基本的に治療は困難で、薬剤散布は予防を目的としています。予防の場合は病気が発生しやすい6月下旬~8月下旬にかけて2週間くらいの間隔で薬剤を撒布します。発生初期の治療の場合は3日間隔で3~4回の薬剤散布を行います。薬剤にはサルバトーレ ME、サプロール、ダコニール、ベニカなど多くの種類が市販されてお



り、それぞれ効果はありますが予防・治療ともに効果を高めるために2～3種類の薬剤を交互に使用することをお薦めします。黒星病は予防と発生初期の対策がとても重要です。そのため、日々の観察が必要で、黒点が現れたら直ちに葉を取り除きます。黒点が出ている葉だけではなく、葉柄(5枚葉全部)ごとに取り除くのがベストです。地上に落ちた病葉も必ず取り除きます。予防の観点からは雨による土壌からの飛散を防ぐために、株元にグラウンドカバーとなる植物を植える、あるいはマットを敷くことも効果があります。

○うどんこ病:小麦粉(うどん粉)をまぶしたように見えるためうどんこ病と呼ばれます。ほとんどの植物が罹る可能性がある病気で、花ではペチュニア・デルフィニウム・パンジー・ルピナス・フロックス・モナルダ・バラ・スカビオサなど多くの種類で発病します。病変が葉全体に広がると光合成ができずに生長阻害が起きるという影響が出ます。特にフロックスでは葉が黄変して落ちるなどの被害が大きく、バラでは蕾に発生して開花前に落ちるなどの被害が出ます。うどんこ病の原因である糸状菌は10種類以上あると言われていますが、25～30℃の温度と乾燥を好むために初夏から夏にかけて乾燥状態が続くと発病します。発生初期であれば、濡れた布で拭くだけでも水分が胞子の細胞膜を壊すので病気の進行を抑えることができますし、重曹水(水 500cc+重曹 1g)や酢水(水 500cc+酢 30cc)をスプレーしても効果がありますが、病状が進むと薬剤の撒布が必要になります。



○灰色カビ病(ボトリチス病):名前のとおり灰色～黒色のカビが葉や蕾に出る病気です。マリーゴールドやチューリップ、キク、バラなど多くの花で発病します。イチゴでよく見られる病気です。茎で発病すると水や栄養の流通が阻害されるので、その部分から上は枯れます。茎が茶色く変色して枯れているものはほとんどこの病気が原因です。一年草では株全体に広がる場合もあり、その株はやがて枯れます。気温 20～25℃で多湿な条件下で発病しやすく、病状が進行すると薬剤の撒布が必要です。



○べと病:野菜に多く発生する病気ですが、バラを始め様々な草花にも発生します。雨などによって土壌中の病原糸状菌が飛散して葉裏に付着することで感染します。最初は地面に近い葉に黄色や褐色の斑点が出て、進行するとステンドグラス状になって広がります。やがて病葉全体が黄色や茶色になり、湿度が高いとべとべとになって落葉します。こまめな観察で発生初期に病葉を取り除くのがベストですが、放置すると短期間で蔓延するので病気が株全体に広がる前に薬剤で消毒します。気温が 15～20℃と比較的涼しい時期に発生しやすいので春や秋に要注意です。

○立ち枯れ病:土壌中の糸状菌が根に寄生して発症する病気です。キク・コスモス・ビオラ・ゼラニウム・カーネーション・トルコキキョウなど多くの種類の花で発生します。発病すると下部の葉が黄色や褐色に変わり、やがて茎や上部の葉に病変が広がって枯れてしまいます。「せっかく植えた花が枯れてしまった」という場合、実はこの病気が原因であることが多い要注意の病気です。高温多湿の条件下で発生します。薬剤も市販されていますが、根の病気のために薬剤の効果はあまり期待できません。水はけの良い健康な土壌を維持することが最大の予防です。

○根腐れ病:立ち枯れ病と同様に糸状菌が根に寄生して起こる病気ですが、立ち枯れ病が葉の変色から始まるのに対して、根腐れ病は水分を吸い上げることが出来なくなるので植物全体が萎れた感じになるのが特徴です。場合によっては地際の茎に気根(根の代わりになる突起)を出して水分を吸い上げよ

うとすることもあります。多くの植物では気温 25～30℃で多湿な状態で発病しますが、ガーベラに寄生する糸状菌は気温 10℃前後で発病させます。発病初期であれば水やりを控えてやや乾燥状態にしたり、薬剤を灌注したりして治療することもできますが、植物全体が萎れるような状態だと回復は困難です。従って、基本的には土壌の健康維持が予防にとって重要になります。

○ウイルス病:糸状菌ではなく、植物ウイルスが原因の病気です。葉が縮れたり、色がモザイク状になります。病気自体が原因で枯れることは少ないですが、生長は悪く、良い花は咲きません。人間のウイルス病と同様に治療薬は有りません。発病したら抜き取って焼却処分し、周辺の土壌も消毒する必要があります。主にアブラムシによって媒介されますが、ウイルス病に罹っている植物で使った挟みなどを使用することによって感染することもあります。

○予防策:最初に記したとおり、植物の病気は土壌中の病原糸状菌が原因です。従ってそのような悪玉糸状菌を殖やさないように落ち葉などの植物残渣は取り除く、未熟な堆肥は使わない、窒素肥料を多用しないなどのことに留意してください。また、うどんこ病を除く病気の大部分は多湿な環境が引き金になります。従って高密度植栽は通風を妨げて多湿な環境にしますので注意が必要ですし、植物が混みあっている状態は一旦病気が発生すると蔓延しやすいということにも留意してください。

●害虫と対策

○アブラムシ: 日本には 700 種類もいるアブラムシ、その種類によってバラ・カンパニュラ・ルリタマアザミ・ヘメロカリスなど寄生する植物が異なります。主に蕾や新芽、その近辺の茎に寄生します。寄生によって植物が枯れ死したり花が咲かなくなることはありませんが、数が多くなると(雌(基本的には全部雌です)は単為生殖による卵胎生で雌だけを産むので指数関数的に寄生数は増大します)栄養分を吸い取られるために花芽の形成や生長、花の咲き方に影響が出ます。また、ウイルスを媒介したり、排泄物にカビが寄生して起こるスス病の原因にもなります。寄生数が少ないうちは酢や牛乳で駆除できますが、数が増えた場合は多くの種類が市販されている薬剤による駆除が効果的です。ただアブラムシは薬剤耐性を獲得しやすいので、種類の違う薬剤を交互に使用します。アブラムシが繁殖するのは気温 20～25℃の範囲が多く、気温が上がる夏は活動するものの繁殖スピードは低下します。従って、初夏と初秋が要注意時期です。

○アオムシ・ケムシ: 蝶や蛾の幼虫であるアオムシ・ケムシは葉や蕾を食害します。少しぐらいの食害であれば放っておいても問題ありませんが、数が多い場合は葉を全部食べられてしまう場合があります。見つけ次第ピンセットなどで捕殺しますが、嫌いな場合は薬剤による駆除を行います。卵は葉の裏に産み付けられますが、一カ所に数十個産み付けられる場合や 1 枚の葉に 1～2 個ずつ何枚もの葉に産卵される場合があります(蝶や蛾の種類によって異なります)。一カ所に沢山の卵が産み付けられた場合でも、ある程度大きくなるまで集団行動する種類や、少し大きくなったら分散してしまう種類もあります。どちらにしても最終的には植物全体に広がって食害します。従って、葉の裏に産み付けられた卵を取り除くのが最善なのですがそれは難しいので、小さな食害痕を見つけたら薬剤散布するようにします。蝶や蛾の種類によっては幼虫の食草種類が決まっているものもありますし(食害されやすい植物とされにくい植物があります)、産卵を春と夏の 2 回行う種類や夏に 1 回行う種類があることも覚えていてください。産卵時期にオルトランなどの薬効が長続きする浸透性殺虫剤を特定の植物に散布してふ化した幼虫を駆除する一方で、食害が開始したらマラソンやスミチオンなどの即効性薬剤で駆除する二段構えの方法をお薦めします。

○ヨトウムシ: 一般にネキリムシと呼ばれる土壌に隠れる性質を持った蛾の幼虫で、代表的なものにヨトウガ(夜盗蛾)の幼虫があります。日中は土の表面に近いところに隠れていて、夜に葉や蕾、種莢を食害するのでヨトウムシと呼ばれている茶褐色のイモムシです。成長すると 4cm ほどにもなる大型でデルフィニウムですと 2 晩ほどで花茎 1 本の蕾が全部食べられることがあります。植物が幼苗の場合は柔らかい地際の茎が食害されるために枯れることがあります。実際に根を食害する訳ではありません。浸透性薬剤も効きにくいので捕殺が駆除のメインになりますが、鉢植えの場合は鉢底裏や鉢土

表面に隠れているので発見しやすいものの地植えでは見つけることが難しいので、「ネキリエース K」などの誘引性殺虫剤を株元に撒いて駆除します。

○コガネムシ：甲虫類のコガネムシの幼虫は土壤中で生活する白っぽいイモムシで、植物の根を食べて成長します(本当のネキリムシです)。芝にとっては天敵とも言える存在です。普通は 1 年間の土中生活期間を経て成虫になりますが、北海道では 2 年かかることもあります。大型の幼虫が多数いる場合、植物は根を被害されて枯れてしまいます。その後、幼虫は移動して近くの植物の根を被害するため、順番に植物が萎れて枯れることになります。ヨトウムシの茎被害でも同じような事が起きますが、短期間に隣り合った植物が萎れて枯れた場合、茎の被害痕があればヨトウムシ、被害痕がなければコガネムシ幼虫が原因であると疑ってください(萎れた植物の根を見ると病気である立ち枯れ病や根腐れ病との区別もできます)。土中の浅いところにいる幼虫には浸透性薬剤でも即効性薬剤でも効果はありますが、深いところにいる場合は殺虫成分が土壤細菌によって分解されてしまうので効果はあまり期待できません(大量の薬剤を灌注すれば別ですが)。宿根草の成株の場合は根が少々被害されたぐらいでは枯れることはありませんが、コガネムシ幼虫の生息が疑われる場所に幼苗や一年草苗を植える場合はダイアジノン粒剤などの接触型殺虫剤を土壤に混ぜ込むと効果があります。

コガネムシ成虫はブドウなどの葉を被害する他、バラの花芯を被害して花を散らしてしまいます。何よりも土中に産卵して幼虫を産み出すので、見つけ次第即効性薬剤をかけるか捕殺しますが、数が多いと対処も困難です。フェロモンを利用した捕獲器「フェロモントラップ」も市販されていますが、隣近所のコガネムシも誘引してしまうのであまりお勧めはできません。コガネムシの発生量は年によって違います(今年は少なかったです)が、私は 7 月にバラに集まってくるコガネムシを可能な限り捕殺して産卵数をできるだけ少なくしようと努力しています。なお、鉢植えに産卵された場合の被害は結構大きく、春に鉢植えのバラや宿根草の芽が出ない場合はコガネムシ幼虫の存在を疑ってください。鉢から植物を出して土を調べてみて、幼虫がいる場合は鉢部分を水中に沈めて窒息死させるなどの対処方法がありますが、土を入れ替えた方が確実です。親コガネムシが産卵できないようにマットや不織布などを敷くのも予防策として効果があります。

○ハダニ：バラの葉は濃緑色ですが、薄い緑色の葉が見られるようになったら裏側を観察してください。小さな赤いクモのような虫や白いクモの巣上の幕がみられたらそれはアカダニというハダニです。ハダニには他に黄緑色のナミハダニなどの種類がいて様々な植物に寄生します。アブラムシと同じような繁殖速度を持っており、寄生された葉は栄養分を吸われるとともにやがて光合成できなくなって葉柄ごと落葉します。高温乾燥を好み、水分を嫌うので晴る日が続く場合は植物に水をかけてやるのも予防に有効な方法です。発生初期の防除や寄生数が増大したときの治療方法はアブラムシと同様です。

○ナメクジ・カタツムリ：ナメクジやカタツムリは大食漢で、柔らかい葉や茎を好んで大量に食べるため、特に春先の新芽や植えたばかりの幼苗が被害されて大きな被害を受けることがあります。晴れている日の昼間は鉢底裏や植物の株元など暗くて湿った場所に潜み、夜や雨の日の日中に出て来て被害します。テカテカした這い痕を残すので、這い痕があれば調べて捕殺しますが、ナメクジが苦手だという場合は「ナメトックス」「ナメクジカダン」などの誘引殺虫剤を植物の株元や潜んでいそうな場所に置いて駆除します。

○その他：カメムシはアブラムシの仲間(分類学的にはアブラムシがカメムシの仲間になります)、植物の汁を吸引しますが数的に多くない場合の被害は小さいので放置します。テントウムシの中には植物の葉を食べる種類もありますが、多くは親も子もアブラムシやハダニ、カイガラムシを捕食する益虫なので駆除しないようにします。アブラムシが増え過ぎた場合はテントウムシだけでは間に合わないのので薬剤散布することになりますが、可能な限りテントウムシは保護したいものです。クモやハチ類も益虫とされています(益虫や害虫という言葉は人間からみた区分なのですが…)。クモはアオムシやケムシの親である蝶や蛾を捕食しますし、ミツバチやハナバチは植物の受粉という大切な役割を担っています。バラの葉を丸切り取ってしまう(巣作りのためですが)ハキリバチも受粉の手助けをしますし、カリバチやスズメバチはアオムシなどを捕食します。もっともスズメバチはサクランボの実やトマトを食べに飛来しますし人的被害もあるので害虫として扱われることが多いですが。

●薬剤の撒布方法と注意点

○薬剤は規定量に希釈して撒布します。少量の場合はスプレー容器で吹きかけても良いですが、1 リットル以上の薬液を撒布する場合は噴霧器(蓄圧式 or 電池式)を使用した方が効率的です。濃度 1000 倍の薬液を 1 リットル作る場合は、水 1 リットルに薬剤 1cc(1g)を加え、さらにダインなどの展着剤を少量(薬液 1 リットルに 0.1cc 程度→3~4 滴)加えてよく攪拌します。展着剤は薬効成分を虫体や植物にしっかりと付着させて効果を高める目的で使用します。

○病気対策の殺菌剤と害虫対策の殺虫剤を混合しても構いませんが、異なる殺菌剤の混合は避けてください。異なる殺虫剤の混合は OK です。例えば浸透性のオルトランと即効性のスミチオンを混合しても構いません。実際に両者の混合剤がオルチオンという商品名で市販されていますし、スミチオンとマラソンの混合剤もスミソンとして市販されています。ベニカやサンヨールなど殺菌剤と殺虫剤が最初から混合されているものも市販されています。混合してはいけない薬剤はそれぞれの薬剤の説明書に明記されています。

○オルトランは薬効成分を一旦植物に吸収させ、それを体内に取り込んだ害虫を駆除するという作用機序があります。そのため即効性はありませんが、薬効が 2 週間程度持続するという長所があります。マラソンやスミチオンなどは薬効成分を虫体内に直接取り込ませて殺すので即効性がありますが、持続性はありません。



○うどんこ病や立ち枯れ病などは複数の種類の病原糸状菌がそれぞれ異なる植物に特異的に寄生して発病します。そのため薬剤によっては対象糸状菌への作用が不十分な場合もあります(例えばリゾクトニア菌には薬効が高いがフザリウム菌にはあまり効かないといった例)し、薬剤耐性の問題もありますので(アブラムシの殺菌剤耐性獲得の問題も同様です)、薬剤は同じものを使い続けるのではなく、数種類のものを交互に使用するようにします。

○概ね 28℃以上の高温時の薬剤使用、規定よりも高い濃度での撒布、規定を超えた使用回数は植物

に葉害を生じる危険性があるので使用説明書の注意書きを守ってください。また、人体への影響もありますので(特に皮膚が過敏な人)、薬剤散布時は長袖シャツやマスク、保護メガネの着用をお薦めします。風が強い時の散布も避けてください。

○薬剤には粒剤、粉剤、乳剤、液剤、水和剤などがありそれぞれ商品名に付記されています。粒剤や粉剤はそのまま散布しますが、乳剤・液剤・水和剤はどれも水で希釈して使用するものなので特に注意しなければならない点はありません。ちなみに乳剤は水に溶けにくい成分を有機溶媒に溶かして乳化剤を加えたもので白濁しているのが特徴ですし、水和剤は水に溶けにくい成分を微粒子にして界面活性剤などを加え、水に馴染みやすくしたものです。

○薬剤の使用に抵抗がある方もいらっしゃると思います。キッチンガーデン講習会の時に配布したオーガニック殺菌剤・殺虫剤の作成方法をこのテキストの最後に付け加えましたのでご参考にしてください。

●アジサイ・ツツジの剪定

○アジサイ

・アジサイは剪定しなくても花が咲きます。ただ、剪定しないと2～3mにまで成長してしまい、花が高い位置で咲くことになります。また、アジサイの花芽が耐えられる最低気温はマイナス17～18℃とされています。恵庭の冬の場合、花芽が雪の下にあれば問題はないのですが、高い位置に花芽があると厳寒期に凍害を受ける恐れがあります。従って、アジサイの高さは1～1.5mくらいにするのが安全です。

・昔からあるアジサイ(ホンアジサイ)は旧枝咲きです。今年、株元から伸びた新梢は今年も来年も花は咲かず、再来年に脇芽が伸びて先端に花を咲かせます。従って、新梢は剪定せずに放置します。花が咲いた枝には翌年も花が咲く花芽が形成されます。花芽が形成される時期は花が咲いてから1～2か月後なので、恵庭では8～9月頃です。花芽が形成される位置は、花から2～4節下の葉の付け根です。従って、秋に深い(低い)位置で剪定すると花芽も一緒に切り取ってしまいますので翌年は花が咲きません。また、春に枯れたように見える枝(旧枝)を切り取ってしまうのも花が咲かない原因になります。枯れた枝は芽が出ないことを確認してから6月頃に切り取るようにします。

・まとめると、新しく株元から出た新梢は剪定せず、花が咲いた枝は8月末頃までに花の下2節で切り取ります。大きい株を切り詰めたい場合は、下の方で咲いている枝は花から2節で剪定しますが、高い位置で咲いている枝や勢いのある新梢は思い切って半分くらいまで切り戻します。翌年の花の数は少なくなりますが我慢です。毎年少しずつ切り戻す方法ではいつまで経っても花の数は増えません。

・西洋アジサイの場合も基本的にはホンアジサイと同様ですが、西洋アジサイには新しく伸びた新梢に翌年花を咲かせる、あるいは新梢でもその年に花が咲くタイプがあります。特にアナベルは新梢に花を咲かせるタイプなので、剪定は任意の場所で行うことができますし、剪定時期も花後であればいつでも行うことができます。

○ツツジ

・ツツジの花芽は花後1～1.5か月半で形成されますので、夏や秋に剪定をすると花芽まで除いてしまうことになり、翌年は花の数が少なくなります。また、ツツジは種ができやすい花木のため、種が大量にできると株に負担がかかって弱ることもあります。そのため、剪定あるいは花殻摘みは花後直ぐに行います。

・常緑ツツジの場合は刈込み剪定が中心になりますが、北海道で植栽されているのはエゾヤマツツジやレンゲツツジなどの落葉ツツジなので強い刈込み剪定は避けてください。生垣として植栽している場合でも庭の中に植栽している場合でも、徒長枝や交差枝などの「暴れ枝」は切除して構いませんが、全体としては新しく伸びた枝を刈り込んで形を整える程度の弱剪定にとどめます。

オーガニック手作りの殺菌・殺虫（アブラムシ）忌避剤

●酢＋ニンニク＋トウガラシ

【 材 料 】

・穀物酢 200ml お酢には抗菌・殺菌作用があるため防虫以外にも、うどん粉病などの病原菌対策にも使用できます。

・ニンニク 2 かけ ニンニクもトウガラシと同様に害虫や害獣の忌避剤として効果があります。トウガラシとニンニクを合わせることで、さらに害虫の忌避効果が高まりますね。ニンニクを切ったり潰したりすると、臭い成分のひとつであるアリシンと呼ばれる臭い成分ができます。酢に溶けだす性質があります。

・トウガラシ 3.4 本 トウガラシは、害虫や害獣が嫌う食べ物・匂いとして農産物が被害を受けないように忌避剤として使われています。トウガラシに含まれるカプサイシンは、脂溶性なので水には溶けませんが油やアルコール、酢には溶け出すという性質があります。

【 作り方 】

容器に穀物酢 200ml、潰したニンニク 2 かけ、種を除いたトウガラシを入れて 1 か月～2 か月置く。

【 使用方法 】

200 倍～400 倍にして使用する。葉の表面に霧吹きで掛ける。

※雨が降ったら流れるので、天気が続く日を選んで散布する。

※ニームオイルや木酢と交互にすると効果が高くなる。

※濃すぎると葉焼けを起こすので注意。

自然農薬／各自然農薬の作り方

●牛乳

効果 アブラムシ・アリ

作り方 用意するものは牛乳と霧吹き。薄める必要はありません。

牛乳を薄めずに霧吹きに入れ、虫の居る葉や茎に吹き付ける。この時、害虫の体全体が牛乳に覆われている必要があるのでまんべんなく散布し、牛乳が乾きやすいように、晴れた日の朝に行うようにします。

使い方

牛乳の膜の中にくるみこまれた虫が、牛乳が乾く際に膜が縮むことで窒息死します。注意する点は、牛乳が乾いたら、牛乳分が残らないように水で植物を綺麗に洗い流すことです。お忘れなく。

●米酢(穀物酢)

- 効果** ウドンコ病。ナメクジなど様々な害虫の忌避、殺菌、消毒効果。植物(根)を丈夫にする。
- 作り方** お米の醸造酢を水で 25～50 倍に薄める。
- 使い方** 1週間おきに、霧吹きなどで植物全体に散布する。ふき取る必要はない。

●にんにく

- 効果** ハダニなどの害虫全般
- 作り方** すり鉢などで「にんにく1玉」をよくすりつぶし、水1リットルを加えます。これを、布でこします。このままフタ付きの瓶などで保存し、使用するとき、さらに5倍に薄めます。
- 5倍に薄めたにんにく液を、霧吹きなどで葉面散布します。にんにくの独特の匂いを嫌
- 使い方** い、虫を追い払い、にんにくの抗菌作用を持つ成分によって殺菌剤となります。なお、病虫害予防として、混植(他の植物と一緒に植える)することでも効果が得られます。

●トウガラシ

- 効果** アブラムシ、アオムシ、キジラミ、ホコリダニ。
- 作り方(1)** 唐辛子(乾燥)一握りにを瓶にいれ、熱湯1リットルを注いでフタをし、一昼夜漬け込みます。
- 唐辛子(乾燥)50g を水から 20 分程度煮たら取り出して、新しい水を1リットル加え、すり
- 作り方(2)** 鉢などですり潰します。
- 少ない量から始めると、すり潰しやすいです。
- 使い方(1)** つくり方(1)の場合、薄めずにそのまま散布します。

使い方(2)

殺虫、抗菌、忌避作用のある辛み成分(カプサイシン)は、水に溶けにくい性質があります。そこで、成分の溶け出しやすいアルコールを用いた唐辛子スプレーが、つくり方(2)になります。

アルコール度 35 度の焼酎 100ml と水2リットルを加えて散布します。

●ネギ液

効果 ウドンコ病、灰色カビ病、軟腐病など。

ネギは生のものを使います。

ネギ一握りに熱湯1リットルを加えて、30分ほどおきます。これを水で2倍に薄め、石け

作り方 ん5g を溶かしいれたら、2回ほど布でこしてできあがりです。

ネギのネバネバが扱いにくいかな…と思っていたのですが、水で薄めることで楽になるので、きちんと2回こしてあげてください。

霧吹きなどで散布します。

使い方 ネギを植えた土壌は、微生物の働きが活発になり、土を元気にしてくれる効果もあります。

●石けん

効果 展着剤として利用します。

作り方 刻んだ石けんを水と一緒に煮て、濃いめの石けん水を作ります。

石けん水を散布することで、アブラムシやアオムシ、キジラミ、ホコリダニから植物を守る

使い方 ことができますが、晴天が続くと、植物自体が痛む原因になることから、展着剤として紹介しています。

もし石けん水のみで散布するときには、散布した翌日には水で洗い流すこと、収穫間近の利用は避けること、また収穫後は十分に水洗いすることの3点に注意して下さい。

●コーヒー

効果 珈琲／ダニ類、アリ、各種病気の予防

珈琲カス／センチュウ、ヨトウムシ類

作り方 珈琲／珈琲を濃いめに入れます(インスタントコーヒーも利用できます)

珈琲カス／珈琲を入れた後のカスを保存しておきます。

珈琲／霧吹きなどで散布します。

使い方 珈琲カス／「追肥用の堆肥:珈琲カス=20:1」であらかじめ混ぜ合わせておき、野菜の株元に蒔きます。

●ビール

効果 ナメクジ

作り方 ビールを容器にいれるだけです。ビールは飲み残しで構いません。

使い方 ビールを浅い容器に入れて、夜に植物のそばや、被害のある植物(通り道と思われるところ)へおいておきます。ナメクジをビールにおびき寄せ、溺れさせることができます。
ナメクジは夜行性なので、夜に行うことが大切。容器の中にナメクジを発見したら、フタをするなどして逃げないようにします。

●アルミ箔

●混植(コンパニオンプランツ)

効果

混植する植物によって、様々な効果が得られます。害虫を寄せ付けないものや、逆に有益な虫(受粉のための蜂など)を呼び寄せたり、植物を元気にしてくれる物があります。

使い方

詳しい方法については、コンパニオンプランツを参照してください。

●木酢液

効果

病害虫全般

作り方

購入したものにあわせて薄めて散布。

にんにく液や唐辛子液と組み合わせて使うと、効果があがります。

天然物質ではありますが、微量の発ガン物質が含まれているそうです。散布するときには、マスクや手袋をお忘れなく。

使い方

50倍～1000倍に薄めた木酢液を、農薬に混ぜ合わせると(1:1)、効果を下げることなく農薬の量を減らすことができます。

但し、アルカリ性の農薬と混ぜ合わせるのは厳禁です

今日の実習

庭づくり講習第5回 9月13日

●宿根草の扱い

- 6月から8月にかけて咲いた宿根草はシードヘッド(花殻、種鞘)ができる時期です。一年草の場合は必ず花殻摘みを行います。宿根草ではシードヘッドを付けたままにしてその姿を楽しむものが多くあります(例えばルリタマアザミ、エキナセア、モナルダ などシードヘッドが大きいもの)。
- もちろんシードヘッドを取り除いても構いませんが、花が少なくなる9月にはシードヘッドも貴重な景観のひとつになります。ただ、シードヘッドを残す場合は成株限定にしましょう。幼苗でシードヘッドを残すと成熟にエネルギーを使うため、その後の成長に影響が出てしまいます。
- 8月に咲いたカサブランカなどのオリエンタル系ユリやグラジオラスは必ず花殻摘みをします。種を作らせると球根が肥大しません。グラジオラスは花が咲いてから50~60日で新しい球根が出来上がりますので、通常は9月に球根を掘り上げて乾燥させ、翌年春まで冷暗所で保管します。ユリは通常、2~3年は植えっぱなしにしておきますが、植え替える時は10月に入ってから植え替え直前に掘り上げるようにします(乾燥に弱いため)。

●挿し芽

- 挿し芽は普通、植物を殖やすことを目的として春~初夏に行いますが、北海道では寒さに弱い宿根草や一年草の命を繋ぐため秋に行われることがあります。株のままポット上げて室内に入れるよりもコンパクトにできるためです。挿し芽が発根するまで時間がかかりますので、秋の挿し芽は9月上~中旬に行います。
- 挿し穂はその年に伸びた新梢を使います。先端から下3節くらいまでのものを使う場合を「先挿し」、その下3節くらいのもを使う場合は「中挿し」と呼びます。先挿しは勢いがあるので発根しやすく、中挿しは発根しにくいものの脇芽が出て複数の茎が期待できる利点があります。
- 挿し穂は一番下の節の直下をカッターナイフなどの鋭利な刃物で斜めに切断します。これは挟みで切ると水管が潰れて水を吸い上げにくくなるのを防ぐのと、断面積を大きくして発根しやすくするためです。葉は水分の蒸発を抑えるために2~3枚残すだけにして、あとはむしり取ってしまいます。大きな葉の場合は葉の面積を1/3~1/2にします。用土に挿す時に「メネデール」に1~2時間浸けるか、切り口に「ルートン」などの発根促進剤を付けると発根しやすくなります。
- 挿し芽に使う用土は赤玉土(小粒)か鹿沼土(小粒)、パーミキュライトを用いますが、清潔なものを使わないと挿し穂が切り口から腐ってきますので注意が必要です。挿し穂を挿したポットや箱は日陰で管理します。ビニール袋を全体に被せると水分の蒸発が防げますが、葉を少なくしていればその必要はありません。
- 過湿にしないように管理すれば3~4週間で発根します。発根した挿し穂は根を切らないよう注意してポットに植え替え、陽に当てるようにして育苗します。
- なお、増殖を目的としたバラなど一般的な植物の挿し芽は6~7月に行います。発根までに時間がかかるため、秋に行うと十分に成長する前に冬になってしまうからです。ただアジサイなど発根しやすく耐寒性の強い植物は9月に挿し芽をしても大丈夫です。

●庭の片づけ

- 10月下旬から11月上旬にかけて花壇の整理を行います。後片付けは面倒な作業ですが、そのままにしておいても結局は春の芽吹きの際に枯れた葉などを片づけなければなりません。雪の下は比較的温度も高く、また湿り気もあるのですが枯葉や枯れ茎などの分解は進みません。そのため、これらの植物残渣が病原糸状菌や害虫の棲み場所になること、春の芽吹きのために不要なものを取り除いておくこと片づけを行う理由です。
- この時期でもまだ花が咲いている植物もありますので、無理に花壇を整理する必要はありません。雪が降るまでに片づければよいので、要は庭主さんの時間の都合次第です。
- 一年草は根ごと抜き取ります。抜いたあとは土を天地返ししておく翌年の雑草取りも楽になりますし、害虫対策にもなります。抜いた一年草を腐植質の補充に花壇に埋める方もいますが、冬季間は植物の分解が進まないで反って有害です。花壇以外の場所があるのでしたら、そこに積んで堆肥にすることをお薦めします。きちんと発酵させれば1年で堆肥になります。
- 宿根草は種類によって処理方法が異なります。冬に地上部が枯れるものは地際で刈り取りますが、ロゼット状態(茎がない短い葉が放射状に出ている状態)で越冬するものはそのまま残します。ロゼット葉ではなく秋に新しい葉を出す植物も多くあります。比較的大きい葉が出ている場合は取り除いても構いません(冬の間に枯れてしまします)が、小さい芽のようなものが出ている場合はそのままにしておきます。自宅の庭に植えている植物の越冬の仕方を覚えておくことが重要です。なお、この時期(10月中旬以降)の光合成は弱いながらも行われており(弱光条件では温度に関係なく低レベルで光合成が行われます)、宿根草は葉があればそれなりに成長します。庭に植えた植物が小さい場合はその辺りの事も考慮に入れながら片づけを行います。また気温が高い時期に強く切り戻しを行うと新芽が出て来ることがありますので、注意が必要です。

●堆肥の作成

前項で堆肥について触れましたので簡単に説明します。

- 堆肥は有機物が発酵によって無機物化されたものです。発酵の定義は説明が難しいので省略しますが、微生物が植物体を構成している糖(炭水化物)を分解して無機物を生成することです。生成物によってアルコール発酵や乳酸発酵など多くの形態があり、基本的には酸素を必要としない嫌気条件下で行われます。英語ではコンポスト。一般的に使われる堆肥の意味は、植物などが積み重なって(堆)できる肥料分の多い土と理解しても良いと思います。
- 堆肥は生ごみ、抜き取った雑草や花、摘み取った花殻、枯れた草花、落ち葉などと少量の土を混ぜ、「生ゴミ分解剤」や「コーランネオ」などの発酵促進剤を投入して作ります。米糠や鶏糞を混ぜることもあります。生ごみや植物は発酵の材料を、生ごみ分解剤やコーランは微生物を、米糠や鶏糞は発酵の材料と微生物を、土は微生物を供給する役割を担っています。発酵には水分と温度が必要なので水と石灰(水と反応すると熱を出す)を加えることもあります。
- 具体的な作り方は、家庭用コンポスト容器やプラスチック製コンテナの底を抜いたもの、庭にスペースがある場合は板などで組んだ堆肥場に材料を入れ、少量の土と発酵促進剤を加え、水分が少ない場合は水も加えます。生ごみも使う場合は土と発酵促進剤の量を増やします。この作業を繰り返していくのですが、発酵が順調に進むと内部温度は50~60℃くらいになります。定期的に材料の切り返し(天地返し)を行うと夏場ですと2カ月くらいで堆肥ができます。なお、上部表面は雨水を防ぐために蓋をしたりブルーシートで覆います。
- 材料を落ち葉だけにして、少量の土、米糠や鶏糞、発酵促進剤、水、石灰を混ぜて1~2年発酵させたも

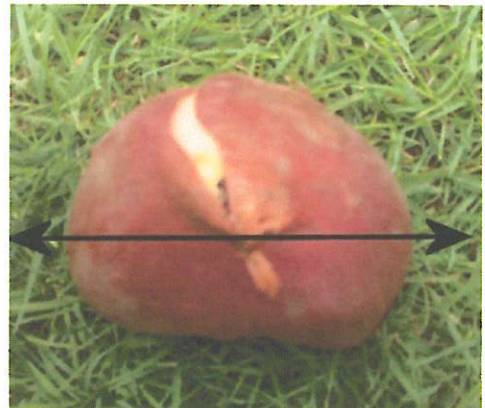
のが腐葉土です。

- 水分が多過ぎると発酵ではなく腐敗が起こります。コンポスト容器などの底が地面なのは余分な水分を排出するためです。また発酵が十分でない未熟な堆肥や腐葉土を肥料として使用すると発酵熱や腐敗物によって植物がダメージを受けますので注意が必要です。
- コンポスト容器や本格的な堆肥場がなくても、黒のビニール袋に細断した植物材料と少量の水、土を加えて口を閉じ、陽当たりの良い場所に置けば夏だと1カ月くらいで堆肥になります。また、雑草などをいちいち処理するのが面倒な場合は、1カ所にまとめておいて予備発酵させ、溜まったら発酵場所に移すという方法もあります。私は春から秋まで植物材料を少しずつ貯めておき(途中で何回か土を混ぜます)、秋にその年に使った鉢土、コーラン、米糠、落ち葉を交互に積み重ね、翌年の春から秋まで月2回切り返し、さらに翌年の春まで寝かせて1年半かけて堆肥腐葉土混合土を作っています。土の量を多くしていますので、そのまま育苗用土や鉢植え用土として使用できます。
- ぼかし肥料は、本来は米糠や油粕、鶏糞を主材料とし、発酵促進剤と少量の土を加えて作ったものです。肥効が強いのでそのまま使用するのは危険です。コンポスト容器から出てくる液体もぼかし肥料と呼ばれ、これも即効性がある強い肥料なので水で薄めて使います。

●秋植え球根の植え方

- 春から夏にかけて花を咲かせる秋植え球根は、亜熱帯地方原産のものを除いて耐寒性は強いですが、それだけに寒さに遭わないと花芽が形成されないものが多いです。通常、北海道では9月中旬から10月下旬にかけて植え込みを行います。地温が高い時に植えると冬になる前に芽が出てしまう場合もありますので、あまり早い時期に植え込まないようにしましょう。

- チューリップは9月下旬から10月中旬頃に植え込みます。春植え球根と同様に、植える深さは球根の高さの2~3倍を目安にします。大凡10cmくらいと覚えておくとよいでしょう。チューリップは球根の下から出る根が体の保持とともに栄養の吸収をします。肥料は球根の下に施すようにします。また、チューリップは球根を上から見て膨らんだ側と平らな側を結んだ線(写真の矢印と直角の方向)に葉が出ますので、球根を植える時は向きを同じにすると葉が同じ方向に出て見栄えが良くなります。早めに植えると10~11月に芽が出てしまう場合がありますが、そのまま放っておいても問題はありません。球根を覆っている外皮は剥がして植えると発芽が良くなりますが、外皮が付いたまま植えても問題はありません。外皮を剥がす時は球根本体に傷を付けないように気を付けましょう。



- ユリも9月下旬~10月中旬に植え込みます。深さは15cmが目安です。ユリは他の秋植え球根と違い、球根の下から出る根の役割は体の保持のみで、球根と地表の間の茎から水や養分を吸収するための「上根」と呼ばれる根を出します。そのため、ユリは球根の上に肥料を施しますが、地面に肥料を置いても構いません。ユリの球根はチューリップの球根と違って外皮を持ちません。そのため乾燥に弱いので、掘上げた球根は直ぐに植え込むか、湿ったオガクズなどの中で保湿しながら保存します(短期間)。買い求めた球根も同様に直ぐ植えるようにしましょう。

●宿根草の越冬

- 宿根草花壇では枯れた茎や葉を取り除き、多年草の雑草も抜いた後、積雪状態あるいは地面が凍結する前に宿根草の周りに腐葉土(完熟のもの)と牛糞堆肥などの有機質肥料を撒布します。冬季間なので分解速度は遅いものの、それでもゆっくりと肥料分が溶け出して土中に浸透していくため春の芽吹きの際の有効な肥料になります。雪が融けてから撒布しても良いのですが、冬が来る前に施しておくことで早めに肥料が効き始めるので芽吹いた後の生長に差が出ます。
- 腐葉土の撒布は肥料分やミネラルの補給の他に、有機質を供給することによる土壌改良効果があります。また寒さにあまり強くない植物の防寒効果も期待できます。恵庭のハーディネスゾーンナンバー(最初の講習時に配布したテキスト参照)は Z6 のため、Z6 以下の植物は特に防寒対策をしなくても地植えで越冬できますが、アガパンサスやタリクトラム(カラマツソウ)、アガスターシェなどの Z7 相当の植物は防寒対策が必要になります。具体的には腐葉土を植物の上と周囲に厚めに(3cm くらい)盛りまします(マルチングと言います)。このハーディネスゾーンナンバーは同じ種類の植物でも「種」や「品種」によって異なる場合があります、各家庭の庭の条件によっても異なります。例えば私の庭では Z7 のアガパンサスは 5cm のマルチングをしても越冬できない場合が多く、越冬できても大きなダメージを受けています。また、恵庭でも 12 月に積雪がない状態でマイナス 15℃以下に気温が下がるとハーディネスゾーンナンバーは Z6 ではなく Z5 相当になってしまいます。従って、ご自分の庭に植えた宿根草がどのような冬越しをしたのか、春に正常に芽吹いたかどうか、芽吹き後の生長に問題がないか、マルチングが必要か不必要か、そもそも地植えで越冬可能か、などの点をきちんと把握することが大切です。

●バラの越冬

- この時期のバラは三番花あるいは四番花がまだ咲いている場合もありますが、強い寒気が入ってくる前に冬支度を行います。地植えのハイブリッドティー、フロリバンダ、シュラブは株全体を 3/4 くらいの高さに切り戻し、細枝を整理するくらいにとどめます(弱剪定)。強剪定を行わないのは冬の寒さで先端が枯れ込む枝が出てくるためです。枝をある程度整理したら、葉を全てむしり取ります。葉柄ごと下に引っ張ると根元から取れます。葉を除去するのは病葉を残さないのと、健康な葉も春までには落ちて病原菌の温床になるので結局は落ち葉も取り除かなくてはならないためです。葉を取り除いたら、雪による枝折れを防止するため株全体を紐で縛り、支柱を立てて結索します。場合によっては寒風による枝枯れを防ぐため、支柱に寒冷紗などを巻きます。なお、黒点病で葉がほとんど無くなっている場合は枝にも病患部が広がっていることが多いです。そのような状態では翌年の早い時期に再び黒点病が発生することが多いため、葉を除去した後に石灰硫黄合剤 8 倍液で株全体を消毒することが効果的です(石灰硫黄合剤は少量容器での販売が禁止されており、販売されているのは 18 リットル入りのみです)。
- 鉢植えのバラも地植えバラと同様に扱います。ただ、鉢植えのまま外気に晒すと鉢全体が凍って株が弱ることが多いので、鉢の部分を土中に埋めることをお勧めします。
- ツルバラは、枯れた枝や花の付き方が悪くなった古い枝を根元から切除し、暴れ枝を整理するくらいで切り戻しは行いません。ツルバラは一般的に大きく(高く)生長し、また原種系のツルバラのように枝数が多いものがほとんどなので葉の除去は行いません(春の落ち葉は除去します)。ただ、ハイブリッドティーの枝変わりやシュラブの「半つる」系品種は枝数も少ないので、手が届く範囲で葉の除去を行うと良いと思います。また原種系のツルバラを中心に耐寒性が強いものが多く、構造物に結索されている場合が多いので木立バラのような防寒・枝折れ対策はあまり必要ありません。ただし、ノアゼット系や一部の枝変わり品種のように耐寒性がやや弱いものは、枝を地面に下ろして雪の下になるようにする方が安全です。



○地植えバラ、鉢植えバラともに宿根草と同様に株回りに腐葉土や有機質肥料を施しておきます。春になって雪が融けたら支柱を外し、結索も解きます(3月下旬～4月上旬)。芽が膨らむ(芽が動くという言い方をします)前に枯れた枝の除去や枝の切り戻しを行います(4月中旬～下旬)。新しい枝が伸びる高さをイメージして高めに仕立てる場合は 2/3 くらい、高さを抑える場合は半分くらいまで切り戻します(強剪定)。細い枝も整理してしまいます。この時、芽の位置に注意しながら(内側を向いている芽を残すと枝は内側に向かって伸びてしまいます)、芽の 5mm 上でカットするようにします(芽の下あるいは芽と芽の中間でカットすると枝のその部分が枯れ込みます)。

●クレマチスの越冬

○遅咲き大輪系(ジャックマニー系)は新旧両枝咲きなのですが、地際から伸びる新枝でも 2.5～3m 以上の高さまで生長するため地際まで切り戻しても構いません。ただ、私は 3～4 節残しておきます。翌年に残した旧枝の節から芽が出ることが多く(必ず出るとは限りません)、その場合 2 本の枝が出るので枝

数を多くすることができるからです。防寒対策は特に必要ありませんが、残した枝が雪で折れることがあるので枝をまとめて結索して構造物などに固定しておくといよいでしょう。

○早咲き大輪系(パテンス系)も新旧両枝咲きなので、通常は古くなって花付きが悪くなった枝を切除したうえで3~4本の旧枝をそのまま残し、残りの枝は地際あるいは3~4節残して切り取ります。旧枝を全部残すと枝が混みあって管理が大変になります。なお、旧枝を全部残すと地際から出る新枝の数は少なくなり、旧枝を全部カットすると地際から出る新枝の数は多くなります。防寒対策は必要ありません。なお、ジャックマニー系は新枝咲きの性質が強く、パテンス系は旧枝咲きの性質が強いことも覚えておくといよいでしょう(品種によっては新枝咲きをみのジャックマニー系、旧枝咲きをみのパテンス系もあります)。

○春に咲く桃色の「ルーベンス」に代表されるモンタナ系は完全旧枝咲きなので、地際から伸びた新枝も含めて剪定・切り戻しは行わず、枝先を軽くカットする程度にとどめます。ただ、枝数は年々増えていきますので(花数も多くなります)、古い枝は根元から切除した方がよいでしょう。

○「ベティ・コーニング」「エミリア・プラター」などのビチセウ系、「プリンセス・ダイアナ」などのテキセンシス系、「アフロディーテ・エレガフミナ」などのインテグリフォリア系は完全新枝咲きなので地際まで切り戻します。ただしビチセウ系はジャックマニー系と同様に3~4節残しておくところから新枝が伸びることが多いです。どの系統も防寒対策は必要ありませんが、バラと同様に翌年のために腐葉土と有機質肥料を株回りに施しておきます。

●庭木の越冬準備

○広葉樹、針葉樹ともにこの時期は剪定に適した時期です。特に広葉樹は葉がなくなるため樹形の確認がしやすく、樹液の循環も低レベルになっているので枝の剪定が木にかかる負担も少なくなります。高くなり過ぎた高木は太い枝を中心に落としていきます。徒長枝も剪定しますが、徒長枝の途中で剪定するとさらに勢いがある枝が出てくるので徒長枝は必ず根元から切除するようにします。

○低木ではツツジなどの花木類の花芽を取ってしまわないようにこの時期の深い刈込み剪定は避け、徒長枝や逆さ枝などの「あばれ枝」の切除程度にとどめます。道内で普通に植栽されているものであれば防寒の必要はありませんが、除雪の雪が溜まる場所ではユキヤナギやコデマリなどの枝が細いもので雪による枝折れが起こることがあります。その場合は支柱を株の四隅に立ててネットなどで覆うとある程度枝折れを防ぐことができます。